ぼくのねこ ポー

ねこの気もち

2年　S・Wさん

　ねこに目がないぼくは、この本が大すきだ。じゆうにお絵かきしていい時、ぼくはいつもねこの絵をかく。だから、もし目の前にポーがあらわれたら、つれて帰りたくなると思う。お話がすすむたび、谷山くんの気もちに、
「うんうん、そうだよね。」
ぼくはあいづちをうってしまう。ポーが谷山くんのポーでいられますように。そうねがっていたけれど、ぼくはだんだんふあんになってきた。ポーは、森くんのトムかも知れない。そして、谷山くんが気づいた「トムの気もち」ということばに、はっとした。ぼくも考えてあげられなかったからだ。
　ぼくの家ではねこをかっていない。
「ねこをかいたいな。」
お母さんにおねがいすると、
「うちは出かけることが多いから、おせわできないでしょう。」
おゆるしは出なかった。だからぼくは、親せきの家でよくねことあそんでいる。そのねこの名前は「メロン」と言う。ひいおばあちゃんの弟、たあおいちゃんの家でかっていて、目がみどり色。とてもかわいいねこだ。
　たあおいちゃんは、足のちょうしがわるくなった。メロンのおせわができないかも知れない、という話を聞いて、ぼくはさいしょに、
「家でメロンをかえるかな。」
こんな風に思ってしまった。その時、ぼくは森くんとトムの顔がうかんだ。森くんの気もち、トムの気もち。たあおいちゃんの気もち、メロンの気もち。ぼくは自分のことばかり考えていたことがはずかしくなった。たあおいちゃんはまわりの人にサポートされながら、今もメロンとなかよくくらしている。
　谷山くんはたくさんなやんで、こうどうにうつした。ぼくも同じことができるだろうか。どうするかえらばなければいけない時は、この本を思い出そう。気もちを考えてこうどうすれば、きっとさいごは「よかったね」と言えるようになるはずだ。